

当院の新型コロナウイルス感染症対応について

今般、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、瞬く間に世界に広がり、多くの国では医療崩壊も生じて、多数の犠牲者を生むパンデミックの様相を呈しています。本邦においても、経済崩壊、医療崩壊を防ぎつつ感染を終息させるという難しい舵取りが迫られています。結核という感染症に対峙してきた歴史が長く、感染症指定医療期間にも認定されている当院に対しても、早くから SARS-CoV-2（新型コロナウイルス）陽性の方の受け入れや、検査センター機能を要請されてきました。しかし、結核という感染症治療の経験から、十分な設備を伴わない安易な受け入れは、むしろクラスターを発生させるリスクが高いことが予見されますし、感度や特異度の問題が解消していない検査を徒らに増やすことは、偽陽性、偽陰性症例を増加させるのみであり、効果的な感染予防策にはなり得ないことも明らかです。また、広く知られているように、患者さんを治療するために必要な薬剤の入手難、職員の安全を担保するために必須な防護具の不足等、現実的に積極的な対応の妨げとなるような要因は枚挙に暇がありません。そこで、新型コロナウイルス感染症撲滅に対して当院に何ができるのかを真剣に検討して参りましたが、この度、苦渋の選択ではあるも、結核の治療を一時停止し、感染予防設備の完備した結核病床の一部を、一時的に新型コロナウイルス病床に転用せざるをえないとの結論に達しました。その一方で、地域の急性期医療を担ってきた一般病床には新型コロナウイルスを持ち込まない、拡げない対策を徹底し、安全に急性期医療が遂行できる態勢も整えました。一般病床に関しましては、急性期医療の機能が停止してしまった都心部の病院からの手術の要請も入り始めています。医療崩壊は、新型コロナウイルス感染症のために急性期機能が停止してしまうことによっても生じます。この国家的な危機に際しては、地域の一病院の枠を超え、急性期機能としても最大限の機能を維持していきたいと考えています。

これまで当院の結核治療に期待して下さってきた皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、新型コロナウイルス感染症が減少し、事態が好転した暁にはすぐに結核治療に復帰する所存ですので、ご理解のほど、よろしくお願い申し上げます。

公益財団法人結核予防会新山手病院
院長 横倉 聡